

我孫子の景観を育てる会

# 景観あべー

## 我孫子景観基礎研究 その1：杉村楚人冠の“手賀沼ビジョン”に関する考察 -1

建築家・工学博士 野口 修(会員)

### ■はじめに：楚人冠の「田園生活」①

我孫子景観の基礎研究として、まず最初に杉村楚人冠が描いた“手賀沼ビジョン”を探ってみたいと思った。平成24年に本会が発行した『楚人冠のメッセージ -愛する手賀沼と共に-』でも読み取れるが、建築家の視点から見て、楚人冠の著作には日本の近代化という時代の趨勢に立ち向いながら、手賀沼の美しい景観を守ろうとする“地域創生”的アイディアが散見される。ただし、用いられた言葉の歴史背景を正確に踏まえておかないと、楚人冠が根差した理念を見誤ってしまう可能性もある。

例えば「田園生活」という言葉。この言葉は、建築学において“近代都市計画の祖”とされるイギリスの社会改良家エベネザー・ハワードが、自身の著作『明日の田園都市』(1902年〔明治35年〕)で提唱した都市論と関係する。

ハワードの「田園都市」とは、産業革命と資本主義が浸透するなかで、スラム化が進む都市労働者の生活環境を「都市と農村の結婚」、すなわち都市の社会・経済的利点と農村の優れた生活環境を結合した“第三の生活”により解決するものである。

『明日の田園都市』では、自然との共生や自律した職住近接型の都市像が詳細に描かれ、この理論に基づく実験都市が、ロンドン郊外のレッチワースに建設されており。

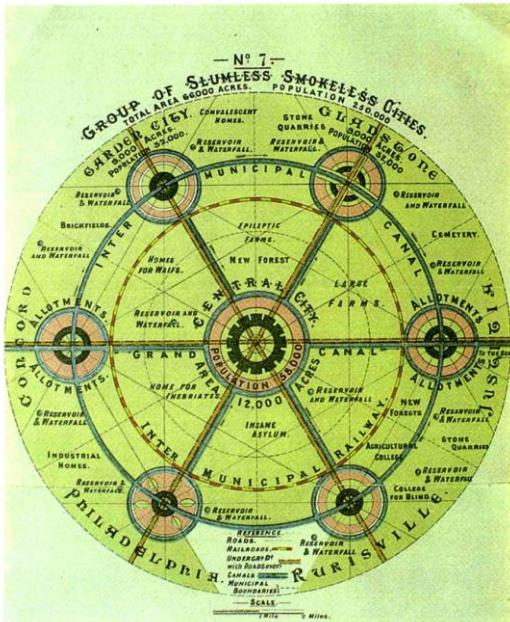
一方、日本では独自にアレンジされた「田園都市」が紹介された。紹介したのは内務省地方局有志編纂の『田園都市』(1908年〔明治41年〕)。

ハワードを含む類似事業を、カタログ的に集めたセネットの『田園都市の理論と実際』を下敷きとするこの著作では、緑豊かな敷地に建つ欧風住宅街の写真ばかりがクローズアップされ、背景となる都市理念が無視されてしまった。

結果、渋沢栄一らの田園都市株式会社が、高級住宅街「田園調布」を造ったように、資本主義が生む生活環境の格差を問題としたハワードの理念とは、真逆の方向で消費されてしまった。

このように多様な解釈がなされた「田園都市」であるが、楚人冠が用いる「田園生活」の根源には、どのような都市理念があるのだろうか？非常に興味深い。

### ■図の解説



図：ハワードによる田園都市のダイアグラム（出典：E. ハワード『明日の田園都市』）